

貧民子女の「就学督責」対策と 「子守教育」について(完)

——その発想法と実態を中心に——

神津善三郎

補遺 (附、就学前幼児教育の発想とその基盤)

これまで、私は本学紀要20号・21号において、明治期の信州における貧民子女を中心とした「就学督責」対策と、「子守教育」について、その社会的背景をもとに、中央とともに本県においては、如何なる対策がとられてきたかを、地方史的観点から考察を試みてきた。それが本県においては、明治32年全国に先き駆けて県令46号「尋常小学校特別学級規程」をもって、その制度的形態を整え、公然たる公立小学校の一学級として、それ以降大正・昭和と三代にわたって県下主要市町村において続けられたのである。

ところが、本年3月、慶応義塾大学「三田哲学会」機関紙「哲学」50集に、子守教育の発想法を中心とした小論を掲載するにあたり、さらに来る10月の教育史学会の発表にあたり、出来得る限り幅広く資料を整理し検討するうち、いくつか見落とし誤りがあることに気づいた。もともと浅学な私にとって、資料にもとづく歴史研究が、新しい資料の発見により、このような過程をたどるものと自覚していたとはいえ、より慎重にして謙虚な研究態度ということを改めて考えさせられたのである。以下これまで発表した内容について、訂正すべきは訂正し、考察しなすべきは考察し、新しく出て来た問題は、問題点として掘り起してみなければならない。そうすることによって、前論(哲学50集)の内容も深められ、そして本論のしめくりとしての「発想法と実態」をもより深めることができよう。

さて、本県における「子守教育」が公立小学校の付属として最初に開始されたのは、明治25年の屋代小学校であるとしてきたが、これは私の明らかな資料の見落としであり、誤りであった。というのは、私が雑誌「信濃教育」(M33.9)に載せられた、在更級中村多重の「子守教育附表飯論」における

ここに予が明治二五年四月以来専ら子守教育に従事し聊か得たる経験上の結果を報告し……¹⁾

より不用意に推定したもので、もう一つの重要な資料となるべきものを見落していたのである。屋代小学校の場合は、「信濃教育会五十年史」によれば

本県における子守教育は、明治二十四年一月八日埴科郡屋代子守学校の設立に遡まる。

とある。従って中村の場合は、屋代小以外の学校か、或いは真木芳太郎(信濃教育会、子守教育法取調委員の一人である)によって始められた屋代子守教育所に、25年4月から奉職したもののか、いずれかであろうが、本県における子守教育所の創始とみられる屋代子守教育所の開設は、24年1月と訂正しなければならない。ところが、屋代をもってその創始とするかどうかということが問題となってくる。それは明治21年の文部省第16年報で、

諏訪郡ハ土地ニヨリ小学生徒ニ農工ノ実業ヲ課シ……又成年輩若クハ退学者ノ為ニ訓導ノ義務ヲ以テ隔夕数時間簡易ナル読方作文算術ヲ授ケ……又尋常高小ニ裁縫専門生徒ヲ入レ家庭教育家事経済修身ノ事ヲ教授シ兼テ簡易ノ算術仮名ノ読方書方ヲ教ヘ或ハ学校内ニ子守子女ヲ教フルノ方法ヲ設ケタルモノアリ其ノ他ノ郡ニ於テモ女子ノ教育ニ注意スルモノ多シ……(傍点筆者)

と記されているのである。この報告は、あたかも明治10年代後半から20年代初頭にかけての就学率の急激な下降期(数年の凶作・物価の低落・金融否塞——第一次経済恐慌期、本学紀要20号47頁参照)における各県における就学督責・奨励対策をつぶさに示すものであるが、その対策の一つとして「子守子女ヲ教フルノ方法」が、諏訪郡のいずれの地においてか、或いは他郡のいずれかにいて、すでに20年前後に行われていたものといえる。然しその場所学校が明らかでない。(諏訪郡高島小学校は明治32年「子守教育研究録」を発表しているが、その後の調査では32年開始が明らかになった。)また、このことは全国的にみても、文部省年報の各府県年報が、すでに明治10年前から大阪・堺等で此の種の学校が設けられ、また10年代になっても「貧民ノ子女ヲ学ニ就カシム

ル法」「学令児童就学」「就学督責」という一連の対策として、新潟・静岡等で此の種の学校が計画され或いは実施されていたかの報告をしている。然しそれらが計画倒れのものであったり、永続的なものでなかったことも各年報から窺うことができるのである。しかるに本県で此の種の学校が公刊された文書に出てくるのは、さきの第16年報すなわち明治21年の「地方視学」の報告以外、今日までのところ明らかにされていない。然し農業県としての本県において、特に農村部に此の種の学校が必要迫られるものであったことは、他県の場合と何等異なるものでなかったと容易に推測されるのである。従って明治10年に「村落小学設置ノ事ニ付各大区会議ノ際此ノ方法ヲ附議⁴⁾」し、同11年2月には教育会議を開き「学令就学勸奨方議案⁵⁾」において「貧困児就学方法⁶⁾」を規定し、4月には愈々「村落小学設置等ノ事⁷⁾」を進達し、10月には「村落小学規則⁸⁾」を設けるに至り、実質的・実態的には、この「村落小学」は「子守学校」「児傳学校」の代位をも果していたものと推測できよう。明治11年の大阪府年報は土曜学校ヲ設クルモノ27ヶ所、児傳学校設クルモノ12ヶ所、従前ノ数ヲ加ヘ34ヶ所、右ハ都テ公立ニ係ル者……ソノ他広島・愛知・和歌山・大分・千葉等ニ此ノ種ノ学校アリ計320校⁹⁾

と報じている程である。いずれにしても、本県では公式的には、明治24年の屋代学校をもって「子守教育所」の創始とすることができようが、実質的・実態的には、それ以前から他県と同様に、特に農村部の学校を中心に此の種の教育が行われ、或いは行われざるをえなかったものといえよう。

そこで、この種の学校の存置有無と関連して、当然つぎのような問題が起ってくる。それは「学令未満児就学ノ件」との関連の問題である。そもそも「学令未満児就学ノ件」の端緒は、明治10年文部大書記官九鬼隆一の学区巡視「記中抄録」における子守教育所的「幼稚園の原素¹⁰⁾」という就学の実態とその発想法にみることができ¹¹⁾る。かかる実態が各地方の（特に農村部等の）いつわらざる実態であったであろうことは、さきの大阪府年報等から容易に推測されるところであるが、この就学の実態と、明治17年文部省達「学令未満ノ幼児ヲ学校ニ入レ学令児童ト同一ノ教授ヲ受ケシムルハ其害不尠少候条右幼児ハ幼稚園ノ方法ニヨリ……」と、これに基づく本県布達253号「学令未満ノ幼児保育ノ件」¹²⁾とは、はたして関係がなかったものかどうかということが問題である。文部省は、これにおくれること10年余、明治29年にも訓令6号「学令未満児就学禁止」¹⁴⁾を発し、本県では早速訓令75号「学令未満児ノ小学校ニ就学セシメザル様……」¹⁵⁾を発

したのであるが、前者17年の場合と後者29年の場合とは、その実態と、それに基づくこれら訓令の意図するところは、かなり異質のものであったと考えざるをえないのである。ということは、前者の場合には、たんに住民の「就学ノ始期計算方¹⁶⁾」の誤りとか、教育熱の旺盛が然らしめたというのではなく、九鬼の発想的基盤から、文部省自身が各府県に「小学校ニ於テ幼稚園ノ方法ニヨリ学令未満ノ幼児ヲ保育スル方法及意見¹⁷⁾」を求め、これに各府県は、

本年ニ於テハ其ノ方法ヲ規定スルニ至ラサルヲ以テ各小学校共先ツ教場ヲ分異シ幼稚園ノ方法ニ拠リ適宜保育スヘキ旨達シタルノミ故ニ其方法意見ハ来年ニ譲ル（大阪府）¹⁸⁾

概ネ子児ハ家事ヲ助力セシムルカ又児護ニ従事セシムル等俄カニ止ムヘカラサルノ慣習ニシテ山間僻村ノ通患（京都府）¹⁹⁾

女兒就学ノ寡少ナル……惟フニ中等以下ニ在リテハ家業ヲ補助シ又ハ子傳ニ従事セシム等其原因一ニシテ……（新潟県）²⁰⁾

前年末ノ調査……学令未満ノ幼児、学令児童ト同一ノ教授ヲナスモノ14,766人一校平均四人余……實際ニ就テ調査スルニ戸籍上ノ年令ニ相違アリテ入学期日ノ都合ニヨリ学令ニ入ルノニ三ヶ月前ニ入学……真ニ害アリト認ムルモノハ僅カノミ而シテ一般人民護児童ヲ入学セシムルノ害アルヲ知リタルニ因リ漸次ニ減シ本年ノ調査2,592人……目下普通教育ヲ猶未タ完全ナラサレハ各校ヲシテ幼児保育ノ法ヲ行ワシムルハ難シトスル所ナレハ簡易ノ保育法ヲ設ケ土地ノ状況ニヨリ之ヲ行ワシメントス（長野県）²¹⁾

と答えているところよりみても、また本県年報が、さらに年を改め

女子教育ヲ蔑視スルハ蓋習慣ノ然ラシムル所ト雖モ本県ノ如キハ蚕桑ヲ業トスルモノ十ノ七八ニ居ルヲ以テ其期節ニ至レハ女子ノ要スルノ業種メテ多ク、終ニ中途退学スル者多シ是女兒就学ノ少ナキ原因……之ヲ匡済センカ為裁縫教授ノ普及ニ尽カシ専ラ就学ヲ奨励スルモ著キ効果ヲ……²²⁾

と、貧民子女の就学対策を汲々と訴えているところよりみても、「小学校ニ於テ……学令未満ノ幼児ヲ保育」することは、「児護ニ従事」「子傳ニ従事」する貧民の子女の就学督責と分離することのできない問題であったといわざるをえない。そのためにこそ子守教育所的「幼稚園ノ原素」を設けざるをえなかったのが10年代の実態ではなかったろうか。これにくらべ後者の場合（明治29年）は、すでに就学率も各府県とも上昇の過程にあり、俗に

地方住民の教育熱の然らしむるところと簡単にはいえな
いまでも、かなりその発想的基盤は異っていたものとい
えよう。従って明治17年の「学令未滿ノ幼児ヲ学校ニ入
レ……」は、「小学校ニ於テ幼稚園ノ方法ニヨリ学令未
滿ノ幼児ヲ保育スル……」として、明治18年には新たに
年報に「幼稚園」の項を加えるが、到底地方財政の逼迫
は、その独立した設立を許さず（全国の幼稚園数は、
17年に17園が、18年には30園になったにすぎない。また
幼児数も1,116人が1,893人になったにすぎない）実質
は、

此外小学校に於て幼稚園の法に倣ひ、女訓導若くは
裁縫教員等の略保育法に通ずるものをして玩具恩物等
を使用し、又簡易なる唱歌と適宜の遊戯を課し、以て
学令未滿の幼児を保育せしものも往々にしてあつた²³⁾
というのがごとく、しかもその法は、

家貧雲ニシテ父兄營業ノ為軛役ヲ受ケ昼間修業の暇²⁴⁾
ナキ兒女及他家ニ傭役セラルル者
にして、「児護ニ従事」「子傳ニ従事」する貧民子女の就
学を督責する法でもあつたと考えざるをえないのである。

このことは、わが国の就学前教育—幼児教育—という
観点から考えるならば、わが国の就学前教育の要求は、
貧民子女の就学問題に絡まりながら「学令未滿ノ幼児ヲ
保育スル法」を小学校に於て考えざるをえなかったところ
から起ってきたものといえよう。明治15年福岡文部卿
代理九鬼隆一文部少補は府県学務課長会議で

幼稚園には別種のものがあつて、都鄙を論ぜず等しく
之を設け、貧民力役者等父母として孩児の養育をな
す暇なきものの子を皆之に入れるべきである。

猶この種の幼稚園にありては、編成を簡易にし、唯
幼児を保育するの保母を得て、平和に遊戯をなさしむ
れば即ち可い、是尚群居街頭にありて危険又は卑猥の
遊戯をなすものに比すれば、大いに優る所あり、其父
母も係累を免れ、生産を営むの便を得て、其益蓋し少
からざるべきである。²⁵⁾

との意を示論し、大衆的な簡易幼稚園の設置を奨励し、
また、明治25年に至つてさへ、「一部貴族富豪の子弟」²⁶⁾
を入れ、「文部省直轄の幼稚園」にして「力めて園制の完
全を期し、地方に設けるもの模範たらしむるために、
頗る規模が大になっている」ところの東京女高師付属幼
稚園は、その校長細川潤次郎をして、

日々労働シテ生活スル人ノ其ノ子ヲ入園セシム可キ
所ニ非ル²⁹⁾

と憂えしめ、分室をつくつて無料で「貧民力役者等」の
子どもを保育せしめ、あわせて学生の保育実習の重要な

場所としたのである。そして大正15年、小学校から独立
し独自の道を歩み始める「幼稚園令」が布かれるに至つ
た際も、文部省は訓令第9号「幼稚園令及幼稚園令施行
規則制定ノ要旨並施行上ノ注意事項」を発し

……殊ニ社会生活日ニ複雑ヲ加ヘ一家ノ事情意ヲ子
女ノ教養ニ専ラニスルコト能ハサル者漸ク多カラント
スル今日ニ在リテハ幼稚園ノ任勞ハ益々重要ノ度ヲ加
ヘサルヲ得ス

幼稚園ノ設置ハ固ヨリ之ヲ任意トシ……又ハ私人ヲ
シテ必要ニ応シテ之ヲ設置スルヲ得シト雖モ父母共
ニ労働ニ従事シ子女ニ對シテ家庭教育ヲ行フコト困難
ナル者ノ多数居住セル地域ニ在リテハ幼稚園ノ必要殊
ニ痛切ナルモノアリ今後幼稚園ハ此ノ如キ方面ニ普及
發達センコトヲ期セサルヘカラス随ツテ其ノ保育ノ時
間ノ如キハ早朝ヨリ夕刻ニ及ブモ亦可ナリト認ム又幼
稚園ニ入園セシムヘキ幼児ノ年令ニ就サテハ從來ノ規
定ト同シク三歳ヨリ……原則トスルモ特別ノ事情アル
場合ニ於テハ三歳未滿ノ幼児ヲモ入園セシム得ルコト
トセリ、之ヲ外國ノ事例ニ徴スルニ幼稚園ニ孩児預所
ヲ附設スルモノ尠カラス為ニ特別ノ事情アル家庭ニ對
シ便益ヲ与フル所頗ル大ナルモノアルカ如シ右ノ規定
ニヨリ三歳未滿ノ幼児ヲ收容セントスルニハ相当ノ設
備ヲ要スルコト論ヲ俟タスト雖モ事情ノ許ス限りニ於
テ適當ニ之ヲ實施スルハ当今ノ時勢ニ照ラン亦極メテ
必要ナリト信ス³⁰⁾

と、特に強調するごとく、特殊日本の資本主義の發達過
程—低賃銀労働者の大量造出にともなう婦人労働者の激
増過程—において、幼稚園をして中産階級以上の独占物
としてではなく、大衆の保育機関たらしめようとする要
求が、すでに明治以来潜在的継続的なものとしてあつた
といふことができるのである。しかも、この要求は明治
10年代以来の「貧民ノ子女ヲ学ニ就カシムル法」と「学
令未滿兒ノ就学禁止」という問題の絡み合いの中から生
れてきたものであつたといえよう。まさに、日本の就学
前教育—幼児教育—は、子守教育所的「幼稚園ノ原素」
という九鬼的な発想法及びその基盤から生れてきたもの
といえよう。もちろん当初から、幼児教育の必要は、

兒童ノ心身ヲ健全ニ發達セシム善良ナル性情ヲ涵養
セントスルニハ幼児ヨリニ著手スルヲ以テ優レリト
スコレ家庭教育ヲ裨補セヘキ幼稚園施設ノ必要アル所
以ナリ³¹⁾

という観点があつたとはいえ、前述のごとき現実的基盤
からの要求が如何に強かつたかを大正15年の文部省訓令
は示している。^(注)

注 このような強い要求が、わが国就学前教育の主

流とはなりえなかった根本的理由と諸条件を、われわれは今日的な意味においても考えてみる必要があるであろう。

さて、つぎに本県の子守教育について、新たに補足しなければならないことは、前述のごとく明治21年前後に、すでに諏訪郡のいずれかにおいて、また他郡においても子守子女を教育する法を設けていたという記実とともに、明治31年には飯山小学校で子守学校が開設されていたという事実である。前者の場合は、もしそれが諏訪郡内であるとすれば、現存する高島小学校の明治32年の「子守教育研究録」とならぬ関係があるものと思われるが、調査の結果はなんら関係のないものであることが明らかになった。飯山小の場合は「飯山学校日誌」³²⁾によれば、「明治31年1月20日、子守教育ヲ始ム」とし、職員会議において「子守教場開設趣要」(目的3ヶ条と学科及その内容を規定したもの)を決定している。こうしてみると、すでに前号までに明らかにしたごとく明治32年に至るまでに、県下主要な市・町(地方郡の中心地)の公立小学校には、「子守教育所」「子守教場」が設置されていたことになる。すなわち、明治21年前に諏訪郡諏訪(推測)、明治24年埴科郡屋代、明治26年小県郡上田、明治27年上水内郡長野(二校)、明治31年北佐久郡小諸・下水内郡飯山、明治32年東筑摩郡松本がそれであり、農村部としては、明治28年上伊那郡箕輪村木下と明治34年³³⁾下水内郡常郷とが、これまで明らかにされたものである。

(注) 松本には、明治30年に小柳町の美以教会にて子守教育が始められているが、このことは次章において詳しくふれるであろう。

その発想法と実態

信州における子守教育が、全国に先き駆けて官側を動かし「尋常小学校特別学級規程」を制定せしめ、公立小学校の付属として設置運営されるもに至ったのは明治32年であった。この32年を境として、厳密にいうならば20年代中頃から30年代前半にかけて、本県教育界には子守教育論なるものが、その方法論までふくめて澎湃として起っている。

明治20年代中頃から30年代前半は、すでに前号までに明らかにしたごとく、本県においても、23年24年と打ち続いた凶作と経済恐慌の波は、学童の就学問題にも深刻な影響を与え、中央とともにその対策が種々構じられた時期であった。しかも、この期においてなお重要なことは、国家的立場＝資本の立場から「低廉にして不学ならざる労働力の再生産」が要求され、その要求に即した二重構造的教育体系が着々と整備された時期であった。そ

れは、明治23年「小学校ノ種類」として発足した実業補習学校が、明治32年実業学校の種類のひとつとされるに至るまで、各種の低度実業教育(職業教育)が制度的にも整備されたことに象徴されている。いっぽうまた資本のあくなき搾取の陰に、低賃銀労働者の大量進出をみて、都市に農村に深刻な社会問題が起りつつある時、いわゆる「通俗教育」が登場し、労働者の階級的自覚を未然に防ぐため、風俗改良・慈善的教化政策として学校教育の代位的機能を果たすための社会教育論(明治25年山名次郎、明治32年佐藤善次郎等)が、教育勅語イデオロギーをバックとして起ってくるのである。またいっぽうでは、キリスト教婦人矯風会による慈善事業的教育事業が試みられた時期でもあった。かかる国家的資本的要求と、それに絡み合う社会的背景のもとに、本県においては特に子守教育論が起るのである。

本県における子守教育論の指導的役割を果たしたのは、なんとといっても明治31年信濃教育会内に設けられた「子守教育法取調委員」である。なかでも同取調委員の一人で、明治24年埴科郡屋代小学校に子守教育所を始めた真木芳太郎と、明治26年小県郡上田小学校に子守教育所を設けた隠岐清重(前記取調委員の一人)の存在は、本県の子守教育(論)において抜きんできていた。前記取調委員は「子守教育案序論一斑」³⁵⁾を発表し、

……熟々女子不就学の主因を探索するに子守をなすこと其一なり、家庭の貧困なること其二なり、学校教育の女子に適切ならざること其三なり、女子教育の必要を感ずる度薄きこと其四なり、而して其の最も重要なものは第一にあり、生れて明治の盛生に遭逢し是等の原因の為に文化の沢に浴するを得ず、自ら蒙昧の妻となり不徳の母となり、累を其夫に其子女に其家に及ぼすもの個人の為國家の為共に不幸不利の極に非ずや、子守教育は実に此の最大の不幸不利を救済せんとする赤誠熱涙より由来するものなり、題して子守教育という不就学の第一因を除くにおいて何かあらん、授業料を徴せず学具を用せず第二因また去らんのみ、女子の心得を教え技能を授け育児法を説く第三因憂ふるにたらず、女子の品位を高め風儀を改め智徳を養ひ教育の真価を認識せしめば第四因亦減少せん、こは主として消極的方面より見たるものなれども、総じて子守教育の目的とするところは、左の數項にあり、(1)普通教育の欠を補う (2)嬰兒保育の法を教ふ (3)風俗を改良す (4)家庭と連絡を通じ父兄をして教育の真価を知らしむる等により普通教育の普及改良を助く (5)公共的慈善事業の振興を促す、是なり。³⁶⁾(以下略)(傍点筆者)と、子守教育の目的を総括的に論じているが、その積極

的・目的は、就学督責によって子守達の風俗を改良し、あわせて彼女らの背負う嬰兒の保育法を教えることにあったといえよう。このことは、前記取調委員真木芳太郎自身の「子守教育について」³⁷⁾の論述によって、いっそう明らかにされる。

従来世人の子守を遇するや冷淡、既に子守といえば一種の賤しむべきものを意味する適用語となれるの風ありて、貴重なる嬰兒保育の任に当らしむべきものなることも毫も年頭に措かざるごとく、随って其行為の野卑陋劣なるは固より其所なりとして是を怪まざりしなり、吾人教育に身を委ねるもの誰か黙するに忍ぶべけんや、且夫れ子守の任たる国家富強の基礎たる嬰兒を扶掖保育すべきものにして其の保育如何は延いて国家の盛衰に關す豈忽諸に附すべけんや

(以下中段略)

子守の実況前陳の如く危険なり然らば子女保育は元來母の任務たれば断じて子守廃止を實行すべきか然りと雖も……是に於て又子守を雇入るる止むを得ざるに至らん、然らば如何なる道をもって之を救ふべきか他なし子守をして子女保育の法を完からしめざる可からず、之をして子女保育の法を全からしめんと欲せば先づ子守に普通教育を授くと共に子女保育の法を知らしむべからず、是子守教育の設けなかる可からざる所以なり……

一は国家富強の基礎たる嬰兒保育の法を完からしむると共に一は国に不学の徒なからしむる一挙兩得の策と云わざる可からず³⁸⁾

というごとく、まさに子守教育なるものの狙い、その意図するところは就学児童としての子守それ自身にあるのではなく、彼女らの背負いたる嬰兒のために発想されたものであり、それが間接的には就学督責の役を果し「普通教育の欠を補う」に至るといふ一石二鳥の発想にもとづくものである。さらに、この発想は、大正3年県知事より「子守教育成績佳良」として表彰された中村多重が、雑誌信濃教育で子守教育の目的は、子守女子に普通教育を授くる事と嬰兒保育法の改良を謀るにあるというが「予は断じて子守教育の第一目的は嬰兒保育法の改良を謀るに在りと主張す」³⁹⁾とし、「読み書きそろばん等の学科は結局此の第一目的を達するための方便」⁴⁰⁾にすぎないと主張していることは、すでに「哲学」第50集において明らかにしたところである。さらに、これに加えて「風俗改良」的発想を示すものが松本の場合である。⁴¹⁾

さて、松本の場合は、年代不詳の「松本教育所調」に始り、明治38年の「松本子守教育所規定」年代不詳の「松本子守教育所概説」(明治40年以降のものと思われる)⁴²⁾

など、その他幾多の資料が残されているが、なかでも「子守教育ニ関スル雜感」⁴⁴⁾の「子守教育実験の所見」は誠に興味深いものがある。まず、その所見は「子守教育ノ必要」を説き、

子守児童ハ殆ンド皆義務教育未済ノ者ノミナリ、抑モ子守ナル者ハ従来ノ習慣上幼児ヲ消極的ニ監護シテ危険ヲ防グ役目ノ如クニ見ユレド決シテ然ラズ、幼児ノ發育旺盛ニシテ最モ大切ナル時機ニ於テ無教育ノ子守ニ委ネ悪感化ヲ受ケンカ三ツ見ノ魂百マデノ例ヘノ如ク長ジテ之ヲ矯正スルハ容易ノ事ニアラズ、或ハ不注意ノ結果不治ノ病根ヲ招ク事アラン又不具者トナスモ少カラズ其他子守ノ無教育ヨリ良家庭ヲ乱シ地方近隣ノ風俗ヲ害スルニ至ル若シ之等ノ弊害ハ忍バントスルモ彼等多クノ子守児童ヲシテ生涯無教育ニ終ラシムルハ実ニ慘酷ニシテ又国家政策ノ上ヨリモ不得策ナルハ当然ノ事ナリ、サレバ子守教育ノ必要ニシテ且救済的教育上最モ急務ナルモノト云フヲ得ベシ⁴⁵⁾

と風俗改良の発想を明らかにし、つぎに「三 教育者ノ用意」として、

四 就学歩合ヲヨククル為メノ子守教育ニアラズ救済的感化事業ナル事ヲ忘ルベベカラズ⁴⁶⁾

と、前記取調委員の発表した風俗改良と公共的慈善事業という面の目的を強調している。しかも、これを具体的に「四 生徒ノ取り扱ヒ」として、

四 彼ラノ家庭ハ多ク冷酷ニシテ温情ニ接スル事ナケレバ教師ノ親切ハ他ノ学校ノ生徒ニ比シテ一層深ク感ズルモノナリ

時々慰安ヲ与ヘテ之ヲ喜バンメ又ハ共ニ郊外ニ散歩シテ自然ノ美ニ触レシメ之ヲ感化誘導スベク殊ニ世ノ逆境ニ立テテ世ヲ怨ミ人ヲ妬ム心アルモノナレバ其心ヲ和ゲ情ヲ以テ善ニ導カバ必ズ良キ結果ヲ得ル事ナラ⁴⁶⁾シ

と事細やかに注意し、そして最後に「五 子守教育ノ効果」として、

三 卑猥ナル俗謡ハ多ク鞠歌又ハ子守歌等ニ行ワル之ニ代ルベキ修身教育的ノ唱歌又ハ子守歌ヲ授ケテ之ヲ唱ハシムル時ハ幼児ヲ善化シ自然ニ近隣社会ノ人ニ及ボスコト勿論ナリ

四 子守ノ教育ハ下層社会ノ裏面ヨリ風化スル一良法ナリ彼等無教育ナレバ風俗褻乱ノ媒介者トナラン

七 救済的事業多シト云ヘドモ子守教育ノ如キハ敢テ多分ノ資金ヲ要セズ動モレバ社会ノ弊害トナルベキモノヲ救ヒテ善良ノ国民ヲ作ルヲ得ベシ⁴⁷⁾彼等ハ此時期ニ於テ教育セザレバ遂ニ救済スル道ナシ

の諸点をあげている。まさに先きに述べたこの期の「通

俗教育」風俗改良・慈善的教化政策として、学校教育の代位的機能をはたすための社会教育論的予守教育の発想法が、ここに明らかにみられる。

ところが、松本の場合「哲学」50集において述べたごとく、明治31年小柳町美以教会に設けられた「松本予守会設置ノ計画」^(注)、すなわちキリスト教婦人矯風会的事業としての予守教育と、その一年後に松本小男子部に付置された予守教育所と、何らかの関連がなかったものかどうか、しかも当時「安曇野」において相馬愛蔵夫妻・井口喜源治・木下尚江等を中心に、禁酒会芸妓置屋反対運動という矯風会的事業運動が行われていたことと合わせ考えてみると、松本小付置の風俗改良慈善的事業としての予守教育所の発想が、これらと全く無関係ではなかったように思われる。然し資料面からは全く明らかにされないし、明治35年から40年まで松本市立幼稚園保母兼付属予守教育所の教師として勤務した斉藤かめ氏（現姓赤羽、明治14年4月生）によっても、美以教会のこの計画との関係は明らかでない。

（注） 明治31年美以教会内の「松本予守会設置の計画」は、松本親睦会の雑誌132号31年4月号によるものであるが、旧松本市史（下）の社会教育篇によれば、30年相原英賢師来り予守教育開始す、とある。また、同教会は当地の禁酒論の嚆矢となり、松本婦人会の前身松本婦人慈善会を組織すと、市史は述べている。「松本予守会設置の計画」の概要は、「哲学」50集に紹介した。

以上、本県において予守教育の指導的役割を果たした信濃教育会の「予守教育法取調委員」の発想法と、比較的本県においておかれて開設された松本の場合について、当時期の社会思潮との関連において考察してきた。これらの発想法がまたおのずからその教育内容を規制してすることは当然とみてよいであろう。

前記「予守教育法取調委員」は、明治32年12月「予守教育法」を編集し、

第一部 読書・作文・習字・修身・育児法 第二部 算術 第三部 唱歌・遊戯・裁縫

と教育課程をいちおう規定してあるが、これは各予守教育所・学級によって、その教科の選び方はまちまちであった。例えば前記委員の真木によって始められた屋代の場合は、修身に唱歌をふくめ

適当な歌曲を選び徳性を涵養しつつ俗謡を改良し、又彼らの遊戯を助けて登校を熱心ならしむると方便とす⁴⁸⁾

とし、読み書き算術は隔年に教え、特に談話という時間を設け、ここで本来の目的たる「嬰兒取扱ひ法」「保育

法」を教えた。また松本の場合においても、その「教授⁴⁹⁾要領で、修身・育児法・国語教授順序・算術教授予定を詳細に定め、その他裁縫・唱歌・遊戯等を加えている。特にその育児法においては、「予守ノ心得」から始り、小児の食物・運動・睡眠・玩具・衣服附裾襪・入浴・予守する場所・言語・行動・小児のかかり易き病氣・救急法と、微に入り細をうがった乳幼児の保育百科というべきが、当教育所の手によって一冊子として纏められている。しかもその原本というべき当時中央から出版された教師用教科書ともいべきものが幾つか用意されていた。（哲学50集において紹介）しかもそれらの内容が天皇制絶対主義教育体制（教育勅語イデオロギー）確立期にふさわしい勤労観・職業観に基づくものであったことはいうまでもない。ところが、これら教科とその数は、育児法を除きいずれも当時の小学校の教科と殆んど変りはないが（その教授内容は別）、毎日「一時より少からず二時より多からず」の時間で、複式の授業をせざるをえない状況、しかも彼ら予守達の出席状態から察しても、それら教科が定められた通り満足に行うことは困難なことであったろう。

さて、彼ら予守達の出席については、各予守教育所はそれぞれその対策に腐心した。明治31年の「飯山学校日誌」は「明治三十一年一月 予守教育ヲ始ム」とし、出席者19名の氏名を連記し、修身・唱歌を授くとし、以下出席の実態を事細かに記している。

一月二十一日 新に出席者二十九人、総計四十八人
一月二十二日 本日新入セシモノ六人、総計五十四人
一月二十四日 総計六十人、一月二十五日 新ニ出席セシモノ四人、総計六十四人、出席者五十二人、此日天気悪シキタメ出席少シ、一月二十七日 出席者四十三人

三十一年四月以後 四月十八日 出席生徒十五人、明日ヨリ皆勤ノモノニ賞与スヘキコトヲ約ス、本日ヨリ長野予守教育所編教訓いろは歌ノ教授ヲ始ム 四月十九日 出席生徒二十五人、昨日ノ事改メテ告示ス、此日町役場ニ至リ町内予守数取調方依頼ス 四月二十日 出席生徒十九人 四月二十一日 出席生徒十三人 二十二日 歓迎生徒（閑院宮殿下御来飯ニ付）十八人 二十三日 御見送り生徒時間早キタメ五人ナリキ 二十五日 本日藤木御旧跡縁日ニ付、其ノ他雨天ノ為カ出席生徒僅ニ三名ナリキ、依ツテ臨時休業トス、改正予守教場開設趣要ヲ作りテ校長ノ手許迄出セリ……

……（趣要 省略）……

六月 前月ニ引キ続キ生徒ノ出席少キヲ以テ之レカ増スヘキ方法ニ就キ研究ヲ始ム、裁縫初歩トシテ縫取

リヲ始ム 七月 生徒出席多数ナルモノニ賞与ヲ与フ
(金額一円五十銭) 一等ヨリ四等 合計十九人 二十
十八日ヨリ出勤票ヲ渡ス、尚ヲ十日ニ充ツル毎ニ青票
ヲ渡ス 八月 前月ノ賞与ニヨリ稍々生徒ノ出席増加
セリ九月 前月ヨリ増加シ来リ四十二人ノ出席者アル
ニ至ル但シ在籍者ハ六十三人ナリ 十二月 廿七日五
等ニ別ツテ賞与ス、之ノ時町長及校長臨場セラル、二
月 末日ヨリ進級試験ヲ行フ 三月 廿六日ヲ以テ証
書授与ヲナス

三十二年四月 末日調査本月中出席セシ生徒数ハ七
十二人ニテ皆勤セン者ハ十人ナリ、珠算ヲ始ム、甲ニ
ハ乗法、乙ニハ敷算法⁵⁰⁾

このように賞を与えて出席を奨励したことは、屋代・松
本・長野の場合も例外ではなかった。長野では、その
「日々の出席奨励」のため

紙の小札の受持教員の認印を捺したるものを出席証
とし毎日一枚づつ与え三十枚集りたる時は、鉛筆一本
五十枚集りたるものは手帳一冊を与え日々の出席を奨
励せり(此の方法は後に弊害を生じ以て廃止せり)⁵¹⁾

の方法をもってし、また「月々の出席奨励」のため、

一月より十二月末迄一ケ年十二種に配当したる教訓
歌、格言、諺等を印刷しおき、毎月の終りに一ケ月欠
席三日以内の者には印刷物の裏面に精励賞の印章を捺
して之を給与し其の枚数に応じて毎学年末に学用品を
給与せり、此方法は頗る好結果を奏し数年間永続実施
せり。⁵²⁾

という対策を構じ、或いは時には

小運動会を催して、学校以外の子守及父兄主人等に
見せしめて其の向学心を惹起せしむる。⁵³⁾

という苦肉の策まで構じた。然し総括的には、

昼中休暇後は欠席者多く冬季はち刻者多し、午後授
業を課せしことあるも、登校誠に不規則にして不便少
からず、此等原因を探究するに家庭において家事の手
伝ひをなさしむこと、嬰兒の飯食上の関係よりくるも
の多きを占むるが如し。⁵⁴⁾

という状態であった。然しその努力も報いられたか、

創立の際は四五十名より七八十名を上下し……年と
共に増加し、その盛時にありては二百五十有余名(明
治三十三・三十四年)……一般市民より大いに子守教
育の必要を認めらるに至り女子教育上裨益する所尠
からず。⁵⁵⁾

というに至り、よってその経費も、

最初一ケ年少しも経費なく僅に篤志者の寄附により
書籍其の他学用品を供給せり、次年度に至り市会亦其
の必要を認めて経費若干を置き漸次増加して三十二年

度には百余円を支出するに至れり。⁵⁶⁾

と、此の種の教育に対する市当局者の理解の程を報告し
ている。然し、いっぽう屋代の場合のごとく、つぎのご
とき出席奨励のための苦肉の策を構ぜざるをえなかった
例もあった。前記真木は、子守教育実施経験数年後にし
て、再び「子守教育について」を記し、特に出席奨励の
法を「子守児取扱注意」⁵⁷⁾として、幾項目かをあげ、その
なかで、⁵⁸⁾

一 一郎落⁵⁹⁾に二三名づつの組長を設け子守児出席勸
誘及学校内外の取り締りを補助せしめること、但し辞
令書を⁶⁰⁾与う。

一 未だ出席せざる子守児の群集せる市街村落等へ
示威運動を試みること。

一 子守は可成教師と親密の関係を持たしむること。

一 子守児主たる者をして教師に代って可成労役に
役せしむること。

一 出席簿に代ゆるに出席札をもってし精勤者には
鉢巻用学校名入手拭等を賞与すること。

一 一ケ月一回位子守組合長会を開き以て彼ら内
部の事情を⁶¹⁾探窮すること。(傍点筆者)
と述べている。

さて以上、屋代・長野・松本を中心に、その発想法
と、それに基づく教育の実態を、紙数の都合で簡単に述
べてきたが、つぎに前記取調委員の一人、上田の隠岐清
重(訓導)の場合をみてみよう。上田の場合も、その設
立当初に子守児を集める方法、或いは出席奨励に苦心し
たことは例外でなかった。隠岐は「子守教育所記事」⁶⁰⁾
で、その「募集ノ方便」として、

一 本科生徒ノ中上級生徒ニ談ルニ子守教育所設置
ノ事ヲ以テシ父兄ニ通ゼシメタリ

一 一ノ趣旨書ヲ作り父兄ノ許ニ贈レリ(別紙ノ如
シ)

一 子守ヲ見ル毎ニ教育所設置ノ事ヲ談リ来リ学バ
ン事ヲ奨ム

一 子守等ノ街頭ニ遊ベル際降雨ニ逢フ事アリシト
キハ学校ニ於テ傘ヲ貸シ与ヘタリ

大体ハ前四ケノ方策ヲ以テ招集セシノミ而テ開所予
定ノ日ニ至リ彼等ノ門前ニ集リ来ルモ恥ヅル有様ナリ
シガ故ニ吾ヲ卑シテ彼等ニ接近シ遂ニ教室ニ入ラン
メタリ、一人入り来レバ二三人ト次第ニ増加シテ遂ニ
初日九十三名ノ多キニ達シタリ⁶¹⁾

と、かなり前記真木の場合とは異った方法をもってした
「募集ノ方便」を記している。またその毎日の出席につ
いても、

子守ノ数多シト雖モ入学スルモノハ凡ソ三十名前後ナルベシトハ初ムルノ前ニ當ツテ余ノ想像セン所ナリキ尤モ一時ハ友ニヒカレテ所謂マネシテ出席スルモノ多カルベケレドモイツシカ減ジテ日々出席スルモノハ前記ノ数トナルベシト思ヒノ外開所ノ日ハ九十三名ノ多キニ達シ次第ニ増加シテ百七十八名ヨリ二百名ニ達セント然レドモ日々出席スル平均数ハ確カニ算定スル事能ハズ凡ソ百五十名前後ト思ヘル而テ初メヨリ今日迄多分ノ増減アラザルヲ見レバ当初三十名前後ト予想セシハ余ノ誤リナリシガ然レドモ日ニヨリ時ニヨリ甚シク減少スル事アリ例ヘバ祭日風雨ノ甚シキ日、農業繁忙ノ時此等ハ著シク影響スルモノニシテ就中祭日ヲ以テ尤モ甚シトス、一話アリ去年四月何日ナリシカ既ニ授業ヲ始ムルノ時来レドモ門前寂シテ彼等ヲ見ズ僅ニ三四ノ頭ヲ数フルノミ未ダ其何ノ理由タルヲ知ラズ然レドモ時己ニ到ルヲ以テ不得已授業ヲ始メシニ少時アリテ相集リテ遂ニ三四十名ヲ得タリ其理由ヲ問ヘバ当町ノ一部分ニ祭典アリシヲ以テ其処ニ遊ソデ遅ルルモノナリト是ニ於テカ余ノ疑念初メテ解クル事ヲ得タリ

嗚乎彼等ハ東ニ西ニ徘徊シ彼所ノ祝典此処ノ祭礼探ガン得テココニ遊び他念ナシ参集ニ遅速アル怪ムニ足ラザルナリ⁶²⁾

と、前記「飯山学校日誌」を、さらに具体的に描写している。

ところが、隠岐にとって「子守教育所」開設は、彼本来の目的ではなかったのである。彼は「子守教育所記事」において、その「設立の基因」を次のように述べている。

貧民ノ子弟ヲ集メテ教育セントハ当初ノ考ナリシガ其計画ノ水泡ニ帰センガ為転ジテ子守教育ヲ起スニ至レリ左ニ其次第ヲ略述セン

貧民ノ子弟ヲ教育センニハ先ツ其父兄ニ諭シテ教育ノ必要ヲ知ラシメ予メ開設ノ趣旨ト其ノ期日トヲ知ラシメザルベカラズ然レドモ彼所ノ長屋ヲ問ヒ此所ノ裏店ヲ尋ネ家毎ニ説キ戸ゴトニ諭スベキニアラズ又新聞ニ広告スル訳ニモナラズ是ニ於テ一計ヲ案シ按摩ノロヲ借りテ諸方ニ説カシメルニ如カズト無病ノ身當テ迎ヘシコトナキ按摩ヲ家ニ迎フル一再、或ハ用ナキ友人ノ家ニ就キテ按摩ヲ迎ヘシメ以テ教育ノ必要ナル所以ト貧民教育ノ趣旨ト開設ノ期日トヲ約シテ諸方ニ説カシメ其ノ他種々ノ方便ニヨリ遍ク此ノ挙ヲ貧民ノ父兄ニ知ラシムル事ヲ務メテ期日ノ至ルヲ待チタリキ⁶³⁾

と、すなわち隠岐にとって貧民子女の教育が、その当初の発想であり目的であったのである。なお彼は貧民教育

の開設にあたって、

斯クシテ心ヲ勞シカヲ至シテ開設ノ日ニ至リシニ門前僅ニ三五ノ貧子ヲラシキモノ佇立スルヲ見ルノミ之ヲ呼ベドモ応ヘズ之ヲ招ケドモ至ラズ出デテ之ヲ迎ヘントシタルニ逡巡シテ遂ニ其影ヲ隠シテ一児女ヲダモ得ル能ワザリキ余ハ茲ニ於テ貧民教育ノ念ヲ絶テリ⁶⁴⁾と、開設当日の涙ぐましき模様を記し、その挫折によって、

彼ト貧民教育ノ計画ノ無効ニ帰スルト共ニ念ヲ彼レニ絶チ思フ此ニ傾ケ同僚出野音吉、河内山虎其他ノ人々ノ贊助ヲ得テ子守教育所設置ヲ見ルニ至ル事トハナレリ⁶⁵⁾

と、貧人教育への念を絶ち子守教育への転換の経過を述べている。

かくして、前述のごとき「募集ノ方便」をもって、子守教育を始めたのであるが、彼の頭からは彼本来の念願である貧民教育への想ひは消えなかった。子守教育所開設の日、93名という思いがけざる子守児の参集に驚き慌て、当初の計画一組編制を数组の編制に変更し、

い組 嘗テ一年若シクハ二三年モ就学セン事ノアリシモノニシテ今ハ退テ子守ノ籍ニアルモリヨリ組織ス
ろ組 此ノ組ニ入ルモノハ子守ニアラズシテ貧民ノ子弟ナリ此等此所ニ来ラズンバ到底一文字ダモ学ブ事能ハズ遂ニ不学ノ徒タランノミ、是レ余ガ今後貧民教育所ヲ設置センガ為メノ萌芽ニシテ前ニ集メント欲シテ能ワザリシモノナリ

は組 此所ニ集ルモノ真正ノ子守女ニシテ目ニ一丁字ダモ弁ゼザルモノナリ而テ此処ニ集ルモノ其数尤モ多シ是レ此教室ノ装置ニ意ヲ用ヒシ所以ナリ（教育装置ノ部）⁶⁶⁾（傍点筆者）

とし、このろ組こそ彼念願の貧民教育の組として、その本来の願いがかなうとともに、なお、まだ、それえの意図のあることを述べている。従って彼の場合、屋代・松本の場合のごとく、当初から彼ら子守児の抱負せる嬰兒のために、彼らを教育し、それが風俗改良と就学督責の役を果すという発想ではなかったといえよう。このことは次の実態からも明らかにされるであろう。

さて、彼隠岐の「子守教育所」の実態として、まずその「教科課程表」⁶⁷⁾をみるに、前記取調委員の編纂した教科目と殆んど異なるところはない。然し特に松本・屋代の場合に主要なものとして考えられた育児法というのがごときは、僅かに修身の一部として加えられているにすぎない。しかもそれらの教科は、

一年間教授セン所ノ結果遂ニ此ノ課程表ヲツクリ出セリ故ニ此表ハ前ニ定メ置キシモノニハアラズシテ彼

等ノ結果ヲ願ハセシモノナリ……⁶⁸⁾

というように、屋代・松本の例のごとく、あらかじめ子守児に上から与うべきもの（育児法のごとく）を定めおいたのではなく、彼らの実態に応じて——一年間の実験的教授の結果——、柔軟にその教科の内容を考えたものであった。従って、このことは、さきの組編制の後に

此他ニ尚記スベキモノアリ彼等子守ノ背負ヒ来リシ処ノ小児中ニハ其年令四五歳ニ達セシモノアリ此等ハ終日背上ニ居ルヲ好マス時ニ自分ノ意ニ任セテ遊バンコトヲ欲スルモノノ如シ故ニ其等ヲ一室ニ集メテ一人ノ教師ヲ保護シ随意ニ遊バシム（其間子守女ハ自己ノ学習ヲナス）

是レ即必要ニ迫マラレ自然ニ形ヅクリシ幼稚園ニシテ彼ノ奢侈的ナルモノニアラズ特ニ此ニ記ス⁶⁹⁾

と記すごとく、彼にとって学習の主体者は、あくまで貧民子女としての子守児であり、その学習のしやすきように種々「教室ノ装置」⁷⁰⁾の工夫をこらした。松本が34年幼稚園の付属となすに至った理由、すなわち、

……更ニ三十四年之幼稚園ノ附属トナス多クノ玩具アリ面白キ絵画アリ小児ヲ遊バシムルニモ都合ヨク且子守ヲシテ幼児保育ノ實際ヲ見セシムル等一層ノ便利ヲ得タリ（傍点筆者）

とは、その発想に大きな相異を認めざるをえないであろう。また彼はその経営方針について、

設立ノ方法 子守教育所設置モ既ニ同僚ノ協賛スル所トナリ茲ニ方法ヲ定ムル左ノ如シ

費用 町費若クハ校費ノ補助ヲ仰カズ又他人ニ義捐金ヲ求メズ

器具 一切器具ヲ貸与ス⁷¹⁾

とし、更に「金円及物品ノ寄附」⁷²⁾について

既ニ設置方法ノ項ニ述ベシ如ク他人ノ寄附若クハ補助ヲ仰グガ如キ考ハ更ニナキノミナラズ他人ニ語リシ事モナカリシガ余ノ教育ヲ思フノ人ハ或ハ金円或ハ物品ヲ贈リテ余ガ事業ヲ助ケリ余ハ之ヲ許セズ今ハ積リテ殆ンド不足ナキニ至レリ、開所以来今日ニ至ル迄寄附セシ所ノ金円及物品ハ大略左ノ如シ

一 金廿九円五十九銭五厘 一 石盤百十四枚……（以下略）

而テ此等寄附者ノ中殊ニ記スベキアリ郡他府県ヨリ余ガ教育所ニ来リテ観ルモノ可憐ナル彼等ハ他念ナク学習スル有様ヲ見帰ルニ及ンデ物品ヲ寄附セルモノアリシ事是レナリ⁷³⁾

と、官に頼らず他に頼らず、おのが初心に共鳴賛同して寄附する浄財をもって経営することを基本とし、その「経費」⁷⁴⁾について

経費ヲ要スル若干ナルカハ開所ノ初ニ当テハ詳細ニ知ル事能ハザリシ是レ以意此事業ニ無経験ナレバナリ唯要スル所ハ多額ヲ費サザウン事ヲ期セリ然レドモ彼等ヲシテ出席倦マザラシメンニハ多少奨励ノ法ヲナサザル可ラズ此方法中ニハ或ハ金円ヲ要スル事モアラン是レ余等ノ当初心ヲ勞セン所ナリ

而テ開所スルノ日ニ当テ器具購求ノ為ニ多少ノ金ヲ費センガ是レハ一回限リニテ其後要スル所ノ通常費ハ一ヶ月平均一円ニテ充分ナリ（日々出席平均数百五十名ト積リ）此内尤モ多ク費スモノハ石筆ニシテ大凡ソ五十銭前後ヲ要ス故ニ此レニ付良キ方法ヲ定メシナラバ尚費用ノ幾分ヲ感ズル事ヲ得ン

以上記スル如キモノナレバ仮令一ノ寄附ナキモ費用ノ出途ニ苦ム如キ事ナカラン唯要スルモノハ教師ノ勞力⁷⁵⁾ノミ（傍点筆者）

と、そのやりくり算段も要は教師自身の惜しみなき労力奉仕——教育愛——に訴えるのである。彼がその教育愛を最も喚起され、彼が教育精神を最も強く表現した「可憐な子守」たちの実態について、

子守ニシテ完全ニ姓名ヲ知ルモノハ殆ド稀ナリ例エバ汝ノ姓名ハト問ヘバ唯花トノミ答ヘテ苗字ヲ云フモノナシ其苗字ヲ問ヘバ其様ナモノハアラズト答ヘ恬トシテ怪ム色ナシ而テ其花ナルハ果シテ實際ノ名ナルヤ否ハ達ニ判定スル事能ハズ如何トナレバ彼等ハ其主家ヲ代ユル毎ニ其名ヲ更ムルモノアレバナリ

余ガ教育所ニ来ルモノノ中ニテ名前二三個ヲ有スルモノ数多アルヲ発見セリ今茲ニ其笑フベキ一話ヲ記ザン或時一人ノ子守（花ナルモノ）余ガ前ニ進ミ来リ曰フ先生私ハ名前ヲときト更メント怪デ之ヲ問ヘバ今回ノ主家ニハはなナル娘アレバ主人ハ汝ヲときト改ムベシト尚更ニはなナル名ハ實際父母ヨリ与ヘラレタル名ナルヤ否ヲ問ヘバ是レハ前ノ主人ヨリ貰ヒシ名ニシテ（前ノ主人ノ家ニハ先キニ花ナル子守アリテ能ク主人ノ命ニ服従シ大切ニ幼児ヲ扱ヒシヲ以テ主人ハ其子守ヲ慕ヒテ後ニ雇フモノニハ皆其名ヲ附ストナシ）父母ヨリ受ケタル名ハすてナリト是ニ於テ始メテ其實際ノ名ハすてナル事ヲ知ル事ヲ得タリ、此如主人ヲ替ユル毎ニ其名ヲ更ムルモノ此ク之レアリ此他尚呼ビ悪キガ為ニ名前ヲ更ムル事モアリ

彼等ハ実ニ名前ヲ重ンゼズ花トナルモ時トナルモ敢テ意ニ掛ル色ナシ而テ苗字ニ至テハ彼等ノ尤モ関セザル所噫三五ノ年齒未ダ姓名ヲ知ラズ唯人ノ呼ブニ任カス其身ヲ重ンゼザル亦知ルベキノミ

前既ニ陳ブル如キ有様ナリシガ余ガ教育所ニ来リテ教ヲ受クルモノ今ハ乃チ姓名ヲ知ルノミナラズ又能ク

之ヲ書ク事ヲ得ルニ至レリ彼等ハ実ニ其姓名ヲ余ガ教育所ヨリ受ケタルモノト謂フベシ⁷⁶⁾

と述べ、さらに「証書授典」の模様を

三層桜上(当校ノ講堂)敷タニ花毘ヲ以テシ飾ルニ
花弁ヲ以テス参列ノ賓客(物品寄附者若クハ関係者)
両側ニ整列シ彼等ヲシテ其中央ニ立タシム平素不規則
極マル彼等モ声ヲ発シ座ヲ乱スモノナク肅然トシテ皆
師ノ命ヲ待テリ授典終ハリテ彼等ノ喜ビ満面ニ溢ルル
ヲ見タリ……⁷⁷⁾

と記しているのである。

おわりに

以上信州における子守教育の発想法とその実態について、特に二つの場合があることを資料にもとづき考察してきたのであるが、そもそも子守教育なるものが、特殊日本的な半封建の本質ゆえに生じた教育上の恥部を象徴するものといえよう。特にその資本主義の経済恐慌の波を常に真正面から受ける本県、すなわち養蚕業と稲作を農業経営の両軸構造とする農業県としての信州においては、その社会的経済的基盤の脆弱性が、貧農民の子女の就学を阻害し、このような変態的な学校を起すに至ったといえるであろう。然し、その発想的基盤が同じとはいえず、そこに学ぶ子守児達を学習の主体者・教育の権利者としてとらえるか否かという問題が生ずるのであろう。もちろん教育勅語イデオロギーをバックとした天皇制絶対主義教育体制確立期においては、風俗改良・慈恵の教化政策として学校教育の代位的機能を果たすための社会教育論的子守教育が、その主流を占める必然性をもっていたとはいえ、なお、隠岐の場合のごとく、民間教育界・現場教師の間に、国民を、国民としての貧民子女・子守児を、学習の権利者としてとらえるという発想が、なおあったことは特筆すべきことであろう。前記現場教師として直接子守児の指導にあたった斉藤かめ氏は、彼女らと次のごとき歌をうたい参観者とともに涙したことを、しみじみと追憶するのであった。

子 守 う た (年代不詳)

一つとや 人は子供が基なり
子守の役目は重いぞや
二つとや ふだん守なる遊びをば
努めてあぶなくない様に
三つとや 皆さん子守が遊ぶにも
背の子供を忘るなよ
四つとや 善き事手本にするがよい
言葉つかいも丁寧に
五つとや いつもにこにこぎずんよく
子守が笑へば子も笑ふ

六つとや むりにおんだり寝かすなよ
おのが気ままにせぬ様に
七つとや 何をするにも子のためよ
子供がいやがる事をすな
八つとや やがて子供は大人ぞや
大人の如く大切に
九つとや 子守はなかなか大事ぞよ
親に代りて子を守る

十とや 毒なものをば与えるな⁷⁸⁾
おもちゃ食べもの気をつけよ
(1967.9.記)

< 注 >

- 1) 明治33年9月号 雑誌 信濃教育 在更級中村多重「子守教育附麦飯論」
- 2) 昭和十年五月発行「信濃教育会五十年史」129頁
- 3) 文部省第16年報、明治二十一年「地方視学」1項75頁
- 4) 文部省第5年報 明治十年
- 5)～6) 県庁文書広報課 資料室 資料
- 7) 文部省第6年報 明治十一年
- 8) 県庁文書広報課 資料室 資料
- 9) 7)に同じ
- 10)～11) 明治以降教育制度発達史 第1巻 473頁
- 12) 前掲書 教育制度発達史 第2巻 275頁
- 13) 県庁文書広報課 資料室 資料
- 14) 前掲書 教育制度発達史 第4巻 13頁
- 15) 県庁文書広報課 資料室 資料
- 16) 前に同じ 明治35年
- 17) 文部省第12年報 明治17年
- 18)～21) 文部省第12年報 明治17年
- 22) 文部省第13年報 明治18年
- 23) 前掲書 教育制度発達史 第2巻 281頁
- 24) 文部省第5年報 明治10年 茨城県年報
- 25)～28) 倉橋・新庄著 日本幼稚園史 328頁
- 29) 細川潤次郎 茶摘録話 明治26年
- 30)～31) 前掲書 教育制度発達史 第7巻
- 32)～34) 明治31年自1月「飯山学校日誌」子守学校飯山小資料
- 35)～36) 明治31年12月 雑誌 信濃教育
- 37)～38) 明治32年8月 雑誌 信濃教育 在屋代真木芳太郎
- 39)～40) 明治33年9月 雑誌 信濃教育 在更級中村多重
- 41)～44) 現松本市立幼稚園 資料
- 45)～47) 前記松本市幼の資料「子守教育ニ関スル雑感」

- ノ「子守教育実験の所見」(資料中、これが最も古いものと思われる)
- 48) 明治31年1月号 雑誌 信濃教育「屋代子守教育状況取調」在真木
- 49) 前記 松本市幼の資料 年代不詳「松本子守教育所概況」「教授要領」
- 50) 32)～34)に同じ
- 51)～56) 明治39年12月 雑誌 信濃教育「子守の教育」長野市立後町尋常高等小学校調査
- 57)～59) 明治32年9月 雑誌 信濃教育「子守教育について」在屋代真木芳太郎
- 60)～69) 県庁 資料「子守教育所記事」明治27年4月小県郡上田尋常小学校内 上田子守教育所
- 70) 松本市立幼稚園資料「松本子守教育所調」の「沿革」による
- 71)～77) 60)～69)に同じ
- 78) 松本市立幼稚園 資料